

千葉市における小中連携・一貫教育

1 定義

(1) 小中連携教育

6・3制を維持し、小・中学校がそれぞれで学校経営を行う中で、小学校高学年児童と中学校生徒の発達段階に配慮し、教職員交流や一貫性のある継続的な指導等を通して、小・中の円滑な接続を図ることをめざした教育である。

(2) 小中一貫教育

新たなハード整備は行わず、既存の小・中学校の配置の中で、学びの連続性を重視した9年間の一貫カリキュラムを実施する教育と定義している。現在、「千葉市版小中一貫教育標準カリキュラム」ができ開発を行うとともに、千葉市型「小中一貫教育」の在り方や進め方の検討を行っている。

2 市研究指定校における取組み

	幸町第三小 幸町第二中	更科小 更科中	川戸小 川戸中 [課題]
研究期間	平成21・22年度	平成22・23年度	平成24・25年度
学校規模 (研究指定当時)	小学校 児童 25学級 825人 教員 36人	児童 7学級 70人 (分校含む) 教員 11人	児童 14学級 356人 教員 20人
	中学校 生徒 11学級 366人 教員 22人	生徒 3学級 46人 教員 10人	生徒 6学級 203人 教員 15人
小・中の配置 (距離)	隣接している	近接している (約300メートル)	隣接している
研究主題	望ましい小中連携のあり方 ～小中一貫教育を見据えて～	小中が連携した行事及び 学習活動の工夫 ～小中が互いの良さに 気づく活動を通して～	川戸小 9年間で育てていきたい 「生きる力」を育むための 指導の工夫 ～小中の学びの連続性 を考えて～ 川戸中 生きる力を育む指導と 実践 ～小中が連携した学習活動 を通して「生きる力」を育 む指導の工夫～
具体的な 連携場面	○体育・音楽の一部で合同授 業や中学校教員による英語 出前授業等。	○体育・音楽の一部で合同授 業や国語の一部で小中の教 師がT.Tによる指導 等。	○児童・生徒・職員のアンケート (実態調査)をもとに、今までの 小中が連携した活動を集約し、 行事や学習指導等について実現 可能な連携を検討・実践する。
	○小学校陸上大会・球技大会 に中学生が支援。 花植え活動、鉢植え交流、 掲示物交流、備品貸借・施 設利用、小学校職場体験、 小学生一日体験入学等。	○小学校児童、中学校生徒全 員でつくりあげる合同運動 会、学校・地域が協働で行 う合同ボランティア活動、 百人一首大会等。	

◇ 小中連携教育の成果と課題

[成果]

- 小中学校が一緒に活動することによって、互いの良さを認め合い、個性を伸ばすことができた。
- ・授業や行事の交流を通して、児童生徒に「中学生の姿に憧れを持つ」「中学校への期待を膨らませる」「小学生に優しい気持ちで接する」「小学生に教えるために努力する」姿が多く見られるようになった。
- ・小学生は、中学生の態度や様子に、憧れや中学校生活の目標を持つことができた。逆に、中学生は小学生の目標となるように意識して行動するきっかけをつかむことができた。(球技の合同練習で)
- 小学生が何度も中学校へ通い様々な活動をする中で、いわゆる中1ギャップを軽減することが期待できる。
- 小・中学校の教師が互いの学習内容、目標、方法、実態などを理解し、9年間の系統性をより強く意識した教育活動の実践につながった。
- 小・中の連携が地域の方々にも受け入れられ、地域の方々との連携にまで広がっていった。
- 備品や消耗費を補充しあうことができ、経費の削減を行うことができた。

[課題]

- 合同で授業するための事前の打ち合わせ、用具の準備、時間割の調整等が必要である。
- 小・中が教科の目標を双方ともに達成させながら授業を行うにはどうしたらよいか、さらに検討していく必要がある。
- 児童生徒の実態から、9年間で育てていきたい力を小・中学校で十分に共通理解し、計画的に実践していく必要がある。